令和 7 年度 東京都内湾水生生物調査 5 月付着動物調査 速報

●実施状況

令和 7 年 5 月 16 日に付着生物調査を実施した。天気は概ね曇り、気温は 22.1～22.3℃、調査地点の風は南南西から南、風速 1.7～4.0m/s であった。調査当日は中潮で、干潮は 12 時 52 分、満潮は 5 時 47 分であった（気象庁のデータ）。また、13 号地船着場においては強い赤潮状態が確認された。

各地点の概況を以下に示す。

項目／地点	中央防波堤外側(その 2)東側		13 号地船着場	
調査時刻	8:20-9:55		10:20-12:20	
水深(m)	5.8		7.5	
天候	曇		曇	
気温(℃)	22.3		22.1	
風向/風速(m/s)	南南西／1.7		南／4.0	
波浪(m)	<0.2		<0.2	
水色	10GY 暗		10Y ごく暗い	
透明度(m)	1.7		0.4	
観測層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	18.6	17.3	21.6	16.4
塩分 (－)	27.8	30.4	24.2	31.0
pH (－)	8.4	8.2	9.0	7.9
DO(mg/L)	7.2	3.7	21.6	1.6
DO 飽和度(%)	90.7	46.1	285.2	20.3
水の臭気	なし	なし	なし	なし
備考	赤潮状態ではなかった。 下層では貧酸素状態は確認されなかった。		赤潮状態であった。 下層は貧酸素状態であった。	

注)観測層：上層(水深 0m)、下層（海底面上 1m）

項目／地点	中央防波堤外側(その 2)東側	13 号地船着場
概況写真		
備考	中央防波堤外側埋立地の外側護岸はしご付近に地点を設定。	中央防波堤埋立地へ通じる第二航路海底トンネル排気塔の南にある船着場西側護岸に調査地点を設定。

●観察結果概要

〇中央防波堤外側（その 2）東側

被度（基盤を覆う面積比）が高かった種は、A.P.（荒川工事基準面）からの高さが高い方からイワフジツボ、イタボガキ科、タテジマイソギンチャク、アメリカフジツボ、ヒメホウキムシ等であった。ムラサキイガイの被度は目視では確認されなかった。

イワフジツボは A.P.+2.1m～+1.4m、イタボガキ科は A.P.+1.7m～+1.1m、タテジマイソギンチャクは A.P.+1.3m～+0.4m アメリカフジツボは A.P.+1.0m～-0.6m、ヒメホウキムシは A.P.-2.7m～-3.8m の範囲でそれぞれ被度が高く、A.P.からの高さ（水深）によって付着生物相に違いが見られた。

護岸前面の底質は浮泥質で、壁面から脱落したと考えられるイガイ科の貝殻、カンザシゴカイ科棲管の破片が確認された。

〇13 号地船着場

被度が高かった種は、A.P.からの高さが高い方からイワフジツボ、イタボガキ科、ヒメホウキムシ等であった。

イワフジツボは A.P.+1.8m～+1.4m、イタボガキ科は A.P.+1.3m～+0.8m、ヒメホウキムシ は A.P.-2.5m～−3.3m の範囲でそれぞれ被度が高く、中央防波堤と同様に A.P.からの高さによって付着生物相に違いが見られた。

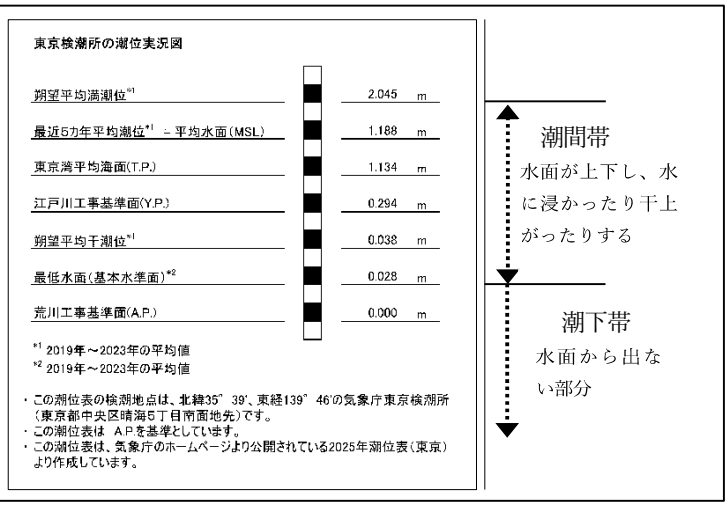
護岸前面の底質は浮泥質で、壁面から脱落したと考えられるイタボガキ科やイガイ類等の貝殻の堆積が確認された。

〇地点間の比較

東京湾奥の付着生物相で主要な構成種となっているムラサキイガイ（外来種）は、平成 31年度以降非常に少なくなっている。今回の観察調査では、13 号地船着場で A.P.+0.7m～+0.1m までの範囲で被度 10%が確認された。中央防波堤では確認されなかった。従来ムラサキイガイの被度が高かった場所では、中央防波堤はタテジマイソギンチャク、アメリカフジツボが、13 号地船着場はコケムシ綱が、それぞれ被度が高かった。

【参考】潮間帯、潮下帯とは

潮間帯とは、潮の満ち引きで水面が移動する部分のこと。東京湾では平均海面（T.P.）を挟み、約 2m の高さ分が相当する。これに対して、その下側の干上がらない部分を潮下帯と言う。環境の変化は激しいが、適応した特有の生物が生息・生育する。通常、干出時間への耐性等により、水平に棲み分けた状態（層状構造）となっている。



（図は、東京都港湾局令和 7 年度東京港潮位表から引用）

＜主な出現種＞

殻の直径が 10mm 程の小型のフジツボ類。主に潮間帯の上部に生息する。東京湾内湾では最もよくみられる種のひとつである。	岩礁帯には殻長 20cm を超える個体もいるが、護岸では殻長 5 cm 程度の小型の個体が多い。淡水の影響を多少受ける河口部等の潮間帯から潮下帯に生息し、東京湾では普通にみられる。
体長 15mm 程、キチン質の棲管に棲み、岩礁や護岸に群生する。触手冠を持ちケヤリムシやイソギンチャクのような姿であるが、箒虫動物という独立した動物門に属する。	体の幅は 15mm 程の小型のイソギンチャク、オレンジのタテジマが名前の由来。岩礁・転石や護岸壁のカキ殻などに固着して生活する。

＜海底の状況＞

護岸前面の底質は浮泥質で、壁面から脱落したと考えられるイガイ科の貝殻、カンザシゴカイ科棲管の破片が確認された。	護岸前面の底質は、壁面から脱落したと考えられる堆積物が主体となっており、イタボガキ科やイガイ類等の貝殻が多数確認された。

<その他の出現種>

6 本の腕を持つ小型のクモヒトデ。カイメンや岩の間に潜む。クモヒトデはいわゆる星型のヒトデとは全く別の仲間であり、内臓の入っていない細い腕と中央部にある盤がはっきりと分かれているのが特徴。(13 号地で確認)	1970 年代後半に国内で発見された外来種で、東京湾では代表的な付着生物。ムラサキイガイよりも淡水の影響の強い水域に多く、汽水域の港湾岸壁で大群生がみられる。(両地点で確認)	殻は白色で、真上から見ると円形～楕円形、横から見ると縦長のドーム型で低潮線以深の貝殻や岩、石、人工構造物上に生息する。低塩分にも耐え、海域や塩分濃度の変化の激しい河口域などの汽水域にも生息する内湾性のフジツボである。(両地点で確認)
飛沫帯の岩礁に群生して生息する。螺塔は小さく尖り、体層は大きく丸い。軟体は黄白色で頭部は黒い。生息範囲も広く、多産種。(中央防波堤で確認)	ワレカラ類は、海藻類のほか、定置網、ロープなどの海洋構造物にも付着する。東京湾には、トゲワレカラ、クビナガワレカラ等が生息する。(両地点で確認)	殻長 2cm 程。殻の形態は変異が大きい。護岸のマガキやムラサキイガイ等が密集している場所に埋没していることが多い。東京湾内では1989年に京浜運河で初めて記録された外来種で、原産地は不明。(両地点で確認)
潮間帯下部から潮下帯に生息する中・大型種。韓国では 2006 年に東海岸への移入が確認されている。韓国では潮間帯の岩礁のほか、船体やブイ、腹足類の貝殻にも多数付着。(両地点で確認)	殻長 3cm で、殻にイボ状の突起がたくさんある。レイシガイとよく似ているが、殻の黒みが強く、殻口内が暗灰色である。 肉食性でマガキなどの貝類やフジツボ類を食べる。(両地点で確認)	港湾の防波堤等に高密度に付着し、貧酸素化に伴う大量へい死により、水質や底質の悪化を引き起こすことがある。東京湾の代表的な付着生物であったが、近年は湾内全域で大きく減少している。(13 号地で確認)